長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆「橋姫」

長谷川　端（文責）　駒田貴子
村井俊司

解題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』『源氏物語秘訣』[1]各一冊の中の岡本主水筆「橋姫」である。

綴葉装、縦二十三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に水辺の草を描いた下絵に、「はしひめ」と墨書きする。全丁数は四十五丁、墨付四十三丁、遊紙前後各一丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は三〜二十三字、字高は十九糎。最終丁の末に「一更了」と記す。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」[2]、玄陳筆「帚木」[3]、玄的筆「空蟬」[4]、岡本主水筆「夕顔」[5]「若紫」[6]「賢木」[7]「明石」[8]、石井了倶筆「末摘花」[9]、西山宗因筆「紅葉賀」[10]、「宿木」[11]、左馬助筆「花宴」[12]、東寺観智院筆「葵」[13]、北左平次行生筆「花散里」[14]、大鳥居信岩筆「須磨」[15]は、既に解題を付し翻刻した。

二、岡本主水の書写と本文のミセケチ・補入等

「橋姫」の書写者、岡本主水の伝記については、「夕顔」を翻刻[16]した際に触れたので省略するが、ミセケチ、補

入等に着目して、ここに翻刻した「橋姫」におけるその数を調べると次のようになっている。参考のため、以前調査した「桐壺」から「澪標」に「宿木」を加えた表も掲げた。

巻	橋姫
書写者	岡本主水
ミセケチ	101
補入	25
傍書	17
合点	10
朱点	49
総計	202

巻	桐壺	帚木	空蟬	夕顔	若紫	末摘花	紅葉賀	花宴	葵
書写者	昌琢	玄陳	玄的	岡本主水	岡本主水	了俱	宗因	左馬助	観智院
ミセケチ	2	0	0	76	70	2	48	7	4
補入	7	0	1	48	49	0	29	3	4
傍書	0	2	0	2	10	1	4	1	8
合点	1	0	0	14	14	0	7	10	3
朱点	47	0	0	113	150	0	28	2	0
総計	57	2	1	253	293	3	116	23	19

巻	賢木	花散里	須磨	明石	澪標	宿木
書写者	岡本主水	行生	信岩	岡本主水	岡本主水	宗因
ミセケチ	94	2	34	79	55	22
補入	55	2	33	40	17	19
傍書	6	1	11	9	6	12
合点	21	1	55	25	5	0
朱点	59	4	84	99	64	0
総計	235	10	217	252	147	53

今回の「橋姫」の書写者は岡本主水であり、主水が書写した他の巻と同様、「一更」という書き入れがある。そのため、校合がなされその結果、一応ミセケチ、補入等が多いといえる。

この二つの表のミセケチ、朱点等、全ての項目についての見解や結論は、やはり、すべての巻の調査の後、または、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、「若紫」の解題[17]で述べた岡本主水の書写した巻は校正がなされ、ミセケチ等が多いという事実を、ここでも確認し、留意しておきたい。

翻刻凡例

一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
一、和歌は改行をし、二字下げとした。
一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
一、本文の傍書は原本通りとした。
一、補入記号がある場合は該当箇所に「〇」を付し、補入文字は右に記した。
一、漢字の踊字「〳〵」は、そのままとした。
一、本文の朱点は「・」で示した。
一、朱合点は、傍線で示した。

（はしひめ）

そのころ世にかすまへられ給はぬふる宮お
はしけりはゝかたなともやんことなく物し給
ひてすちことなるへきおほえなとおはし
けるをときうつりて世中にはした〇められ
給けるまきれに中〳〵いとなこりなく御
うしろみなとも物うらめしき心〳〵にてかた
かたにつけて世をそむきさりつゝおほやけ
わたくしによる所なくさしはな〇れたまへる
やうなり北方もむかしの大臣の御むすめ
なりける哀に心ほそくおやたちのおほし

をきてたりしさまなと思ひいて給にたと
しへなきことおほかれとふかき御ちきりのふ
たつなきはかりをうき世のなくさめにて
かたみに又なくたのみかはし給へりとしころふ

1オ

るに御子物し給はて心もとなかりけれはさ
う〳〵しくつれ〳〵なるなくさめにいかて
おかしからんちこもかなと宮そとき〳〵おほし
のたまひけるにめつらしく女君のいとうつ
くしけなるむまれ給へりこれをかきりなく
哀とおもひかしつききこえ給に又さしつゝき

けしきはみ給て此たひはおとこにてもなと
おほしたるにおなしさまにてたひらかには
したまひなからいといたくわつらひてうせ
給ぬ宮あさましくおほしまとふありふるに
つけてもいとはしたなくたへかたきことおほ
かる世なれとみすてかたくあはれなる人の
御ありさま心さまにかけとゝめらるゝほたしにて
こそすゝしくしつれひとりとまりていとゝすさま
しくもあるへきかないはけなき人々をもひと
りはくゝみたてんほとかきりある身にて

1ウ

2オ

いとをこかましう人わかるへきことゝおほし
たちてほいもとけまほしうし給ひけれと
みゆつる人なくてのこしとゝめんをいみしく
おほしたゆたひつゝとし月もふれはをの〳〵
およすけまさり給ふさまかたちのうつくし
うあらまほしきを明くれの御なくさめにて
をのつからそ過し給のちにむまれ給し君をは
さふらふ人々もいてやおりふし心うくなとうち
つふやきて心にいれてもあつかひきこえさ
りけれとかきりのさまにてなにこともおほ

2ウ

しわかさりしほとなからこれをいと心くるしと
思ひてたゝこの君をはかたみに見給てあ
はれとおほせとはかりたゝひとことなん宮に
きこえをき給けれはさきの世のちきりもつ
らきおりふしなれとさるへきにこそは有けめ
といまはとみえしまていと哀と思ひてうし
ろめたけにのたまひしをとおほしいてつゝこ
の君をしもいとかなしうしたてまつりたまふ
かたちなんまことにいとうつくしうゆゝしき
まて物し給けるひめ君はこゝろはせしつかに

3オ

よしあるかたにてみるめもてなしもけたかく
心にくきさまはし給へるいたはしくやんこと
なきすちはまさりていつれをもさま〳〵に
思ひかしつき聞え給へとかなはぬ事おほく
とし月にそへて宮のうち物さひしくのみな
りまさるさふらひし人もたつきなきこゝち
するにえしのひあへすつき〳〵にしたかひて
まかてちりつゝわか君の御めのともさるさはき
にはか〳〵しき人をしもえりあへ給はさりけ
れはほとにつけたる心あさゝにておさなき

3ウ

ほとをみすてたてまつりにけれはたゝ宮
そはくゝみ給ふさすかにひろくおもしろき宮
の池山なとのけしきはかりむかしにかはらていと

いたうあれまさるをつれ〳〵となかめ給ふけい
しなともむね〳〵しき人もなかりけれはと
りつくろふ人もなきまゝに草あ(庭もイ)をやか
にしけり軒のしのふそ所えかほにあをみ
わたれるおり〳〵につけたる花紅葉の色
をもかをもおなし心に見はやし給しにこそ
なくさむこともおほかりけれいとゝしくさひし(く)〇

よりつかむかたなきまゝにちふつの御かさりは
かりをわさとせさせ給て明くれをこなひ
たまふかゝるほたしともにかゝつらふたにお
もひのほかにくちおしうわか心なからもかな
はさりける契とおほゆるをまいてなにゝか
よの人めいていまさらにとのみとし月に
そへて世中をおほしはなれつゝ心はかりはひし
りになりはて給てこ君のうせ給にしこなた
はれいの人のさまなる心はへなとたはふれ
にてもおほしいてたまはさりけりなとかさし

4オ

もわかるゝほとのかなしひは又世にたくひな
きやうにのみこそはおほゆへかめれとありふ
れはさのみやは世人になすらふ御心つかひを
し給ていとかく見くるしくたつきなき宮の
うちもをのつからもてなさるゝわさもやと人は
もときゝこえてなにくれとつき〳〵しくき
こえこつこともるいにふれておほかれときこ
しめしいれさりけり御念すのひま〳〵には
この君たちをもてあそひやう〳〵およすけ給
へはことならはしこうちへんつきなとはかなき

御あそひわさとつけて(に)も心はへともを見たて
まつり給にひめ君はらう〳〵しくふかくを
もりかにみえたまふわか君はおほとかにらう
たけなるさまして物つゝみしたるけはひにい
とうつくしうさま〳〵におはす春のうらゝか
なるひかけに池の水鳥とものはねうちか

4ウ

5オ

はしつゝをのかしゝさえつるこゑなとをつねはは
かなきことゝ見給しかともつかひはなれぬをうら
やましくなかめ給て君たちに御ことゝも
をしへきこえ給ふいとおかしけにちいさき御ほと

5ウ

にとり〳〵かきならし給ものゝねとも哀におかし
くきこゆれは涙をうけ給て
　うちすてゝつかひさりにし水鳥のかりの
この世をたちをくれけん心つくしなりやとめ
をしのこひ給ふかたちいときよけにおはし
ます宮なり年ころの御をこなひにやせ
ほそり給にたれとさてしもあてになまめき
て君たちをかしつき給御心はへになをしの
なへはめるをき給てしとけなき御さまいと
はつかしけなりひめ君御すゝりをやをらひき

6オ

よせて手ならひのやうにかきませ給をこれに
かき給へすゝりにはかきつけさなりとてかみ
たてまつり給へははちらひてかき給
　いかてかくすたちけるそとおもふにもうき水
鳥のちきりをそしるよからねとそのおりはいと
哀なりける手はおひさきみえてまたよくも
つゝけ給はぬほとなりわか君もかき給へとあれ
はいますこしおさなけにひさしくかきいて給へり
　なく〳〵もはねうちきする君なくはわれそ
すもりになるへかりけるまそとも〇なへはみて

6ウ

おまへに又人もなくいとさひしくつれ〳〵けなる
にさま〳〵いとらうたけにて物し給を哀に
心くるしういかゝおほさゝらん経をかたてにもた
まふてかつよみつゝさうかもしたまふひめ君に
ひはわか君にさうの御ことをまたおさなけれと
つねにあはせつゝならひ給へはきゝにくゝもあら
ていとおかしくきこゆちゝみかとにも母女御
にもとくをくれ給てはか〳〵しき御うしろみの
とりたてたるおはせさりけれはさえなとふか

くもえならひ給はすまいて世中にすみつゝ御

心をきてはいかてかはしり給はんたかき人とき
こゆるなかにもあさましうあてにおほとかなる
をむなのやうにおはすれはふるき世の御た
から物おほもちおとゝの〇御そうふんなにやかやと
つきすましかりけれとゆくゑもなくはかなく
うせはてゝ御てうとなとはかりなんわさとうるは
しくておほかりけるまいりさふらひきこえ心よ
せたてまつる人もなしつれ〳〵なるまゝに
うたつかさのものゝしともなとやうのすくれ
たるをめしよせつゝはかなきあそひに心をいれ

7オ

ておひいて給へれはそのかたはいとおかしく
すくれ給へり・源氏のおとゝの御おとうと八の宮
とそきこえしを冷泉院の東宮におはしまし
し時朱雀院のおほきさきのよこさまにお
ほしかまへてこの宮を世中にたちつき給へ

7ウ

くわか御時もてかしつきたてまつ給けるさ
はきにあひなくあなたさまの御なからひには
さしはなたれ給にけれはいよ〳〵かの御つき〳〵
になりはてぬる世にてえましらひ給はす
又このとしころかゝるひしりになりはてゝいまは

8オ

かきりとよろつをおほしすてたりかゝる御ほ
とにすみ給宮やけにけりいとゝしき世にあ
さましくあへなくてうつろひすみ給へき所の
よろしきもなかりけれは宇治といふ所によし
ある山さともたまへりけるにわたり給おもひ
すて給へる世なれともいまはとすみはなれ
なんを哀におほさるあしろのけはひちかく
みゝかしこましき川のわたりにてしつかなる
思ひにかなはぬかたもあれといかゝはせん花
紅葉水のなかれにも心をやるたよりによ

8ウ

せていとゝしくなかめ給よりほかのことなしかく

た小こもりぬる野山のすゑにもむかしの人物
し給はましかはとおもひきこえ給はぬおりなか
りけり

　　みし人もやとも煙になりにしをなにとて
わか身きゑのこりけんいけるかひなくそおほし
こかるゝやいとゝ山かさなれる御すみかにたつ
ねまいる人なしあやしきけすなとゐ中ひ
たる山かつとものみまれになれまいりつかう
まつるみねのあさきりはるゝおりなくてあか

9オ

しくらし給にこのうちは山にひしりたちた
るあさりすみけりさえいとかしこくて世のお
ほえもかゝるからねとおさ〳〵おほやけことにも
いてつかへすこもりゐたるにこの宮のかく
ちかきほとにすみ給てさひしき御さまにた
うときわさをせさせ給つゝ法文なとをよみな
らひ給へはたうとかりきこえてつねにまいると
しころまなひしり給へることゝものふかき心
をときゝかせたてまつりいよ〳〵この世の
かりそめにあちきなきことを申しらすれ

9ウ

は心はかりはすちすのうへに思のほりにこり
なき池にもすみぬへきをいとかくおさなき
人々をみすてんうしろめたさはかりになんえひ
たみちにかたちをもかへぬなとへたてなくも
のかたりしたまふ・このあさりは冷泉院にも
したしくさふらひて御経なとをしへき
こゆる人なりけり京に出たるついてにま
いりてれいのさるへきふみなと御らんしてと
はせたまふこともあるついてに八の宮のいと
かしこくないけうの御さしさとりふかく物し給け

10オ

るかなさるへきにてむまれ給へる人にや物し給らん
心ふかく思ひすまし給へるほとまことのひしり
のおきてになむみえ給ときこゆ・いまたか
たちはかへ給はすやそくひしりとかこのわかき

人々のつけたなる哀なる事なりなとの
たまはす・宰相中将も御まへにさふらひ給て
われこそ世中をはいとすさましく思しり
なからおこなひなと人にめとゝめらるゝはかり
はつとめすくちおしくて過しくれと人し
れす思ひつゝそくなからひしりになり給心

10ウ

のおきてやいかにとみゝとゝめてきゝ給・出家
の心さしはもとより物し給へるをはかなきこと
に思ひとゝこほりいまとなりては心くるし
きをんなこともの御うへをえおもひすてぬと
なんなけき侍りたまふとそうすさすか
にものゝねめつるあさりにてけにはたこの
姫君たち〇ことひきあはせてあそひ給へ
る河浪にきほひてきこえ侍はいとお
もしろくこくらくおもひやられ侍るやとこ
たいにめつれは・みかとほゝゑみ給てさる

11オ

ひしりのあたりにおひ出て此世のかたさま
はたと〳〵しからんとをしはからるゝをおかしの
ことやうしろめたく思ひすてかたくもてわつ
らひ給らんをもししはしもをくれんほとはゆ
つりやはし給はぬなとそのたまはする・この
院のみかとは十のみこにそおはしましける
朱雀院の十六条院にあつけ聞え給し入道
の宮の御ためしをおほしいてゝかの君たち
をかなつれ〳〵なるあそひかたきになと〇お
ほしけり・中将君は中〳〵みこの思ひすまし

給へらん御心はへをたいめんしてみたてまつら
はやとおもふ心そふかくなりぬるさてあさりの
かへりいるにもかならすまいりて物ならひきこ
ゆへくまつうち〳〵にもけしきたまはり給へ
なとかたちひたまふ・みかとは御ことつてに
て哀なる御すまゐを人つてにきく事
なときこえたまふて

11ウ

世をいとふ心は山にかよへともやへたつ
雲を君やへたつるあさりこの御つかひをさ
きにたてゝかの宮にまいりぬなのめなるきは
のさるへき人のつかひたにまれなる山かけに
いとめつらしくまちよろこひ給て所につけ
たるさかなとしてさるかたにもてはやし給
御返し

12オ

あとたえて心すむとはなけれとも世をうち
山にやとをこそかれひしりのかたをはひけ
してきこえなし給へれは猶世にうらみのこ
りけりといとおしくおもらんす・あさり中将〇
君のたうしむふかけに物し給ふなとかたり
聞えて法文なとの心えまほしき心さし

12ウ

なむいはけなかりしよはひよりふかく思ひな
からえさらす世にありふるほとおほやけ
わたくしにいとまなくあけくらしわさととち
こもりてならひよみおほかたはか〳〵しくも
あらぬ身にしも世中をそむきかほならんも
はゝかるへきにあらねとをのつからうちたゆみ
まきらはしくてなんすくしくるをいとありか
たき御ありさまをうけ給つたへしよりかく
心にかけてなんたのみきこえさするなとねん
ころに申給しなとかたりきこゆ・宮世中を

13オ

かりそめのことゝおもひとりいとはしき心のつ
きそむる事もわか身にうれへあるときなへ
ての世もうらめしうおもひしるはしめありて
なんたうしんもおこるわさなめるをとしわかく
世のなか思にかなひなに事もあかぬ心はあら
しとおほゆる身の程にさはた後世をさへた
とりしり給らんかありかたさこゝにはさゐへきに
やたゝいとひはなれよとことさらに仏なと
のすゝめをもむけ給やうなるありさまにて
をのつからこそしつかなるおもひかなひゆけと

残りすくなき心ちするにはか〳〵しくもあ
らて過ぬへかめるをきしかた行末さらにえ
たとる所なく思ひしらるゝをかへりては心はつ
かしけなる法の友にこそは物し給なれなと
の給てかたみに御せうそこかよひみつからも
まうてたまふ・けにきゝしよりも哀にすま
ゐたまへるさまよりはしめていとかりなる
草のいほりに思なしことそきたりおなし
き山さとゝいへとさるかたにて心とまりぬゆく
のとやかなるもあるをいとあらまし水の

13ウ

をと浪のひゝきに物わすれうちしよるなと
心とけて夢をたにみるへきほともなけに
すこく吹はらひたりひしりたちたる御ため
にはかゝるしもこそ心とまらぬもよほしなら
め女君たちなに心ちして過し給らんよの
つねの女しくなよひたるかたはとをくやと

14オ

をしはからるゝ御ありさまなり仏の御方には
さうしはかりをへたてゝそおはすへかめるすき
心あらん人はけしきはみよりて人の御心
はへをも見まほしうさすかにいかゝとゆかし

14ウ

うもある御けはひなりされとさるかたをお
もひはなるゝねかひに山ふかくたつねきこえ
たるほいなくすきすきしきなをさりことをう
ちいてあされはまんもことにたかひてやなと
思ひかへして宮の御ありさまのいとあはれなる
をねうんころにとふらひ聞えたまひたひ〳〵ま
いり給つゝ思ひしやうにうはそくなからおこなふ
山のふかき心法文なとわさとさかしけにはあ
らていとよくのたまひしらす・聖たつ人さえ
ある法師なとは世におほかれとあまりこは〳〵
しくけとをけなるしうとくの僧都そう正の
きはゝ世にいとまなくきすくにて物の心を

15オ

とひあらはさむもこと〳〵しくおほえ給又その
人ならぬ仏の御てしのいむことをたゆつはか
りのたうとさはあれとけはひいやしくことは
たみてこちなけにものなれたるいと物しく
てひるはおほやけことにいとまなくなとしつ
つしめやかなるよひの程けちかき御まくら
かみなとにめしいれかたらひ給にもいと
さすかに物むつかしくなとのみあるをいと

あてに心くるしきさましてのたまひいつること
のはもおなし仏の御をしへをもみゝちかきたと
ひにひきませいとこよなくふかき御さとりには
あらねとよき人は物の心をえたまふかたの
いとことに物し給けれはやう〳〵みなれ奉り
給ふたひことにつねに見たてまつらまほしうて
いとまなくなとしてほとふる時は恋しうおほ
え給・この君のかくたうとかりきこえ給へれは
冷泉院よりもつねに御せうそこなとあり

15ウ

てとしころをとにもおさ〳〵きこえ給はすい

みしくさひしけなりし御すみかにやう〳〵人
め見るとき〳〵ありおりふしにとふらひきこえ
給こといかめしうこの君もまつさるへきこと
につけつゝおかしきやうにもまめやかなるさま
にも心よせつかうまつり給こと三年はかりに
なりぬ・秋のすゑつかた四きにあてゝした
まふ御念仏をこの河つらはあしろの波も
このころはいとゝみゝかしかましくしつかならぬ
をとてかのあさりのすむ寺のたうにうつろひ
給て七日のほとおこなひたまふ姫君たち

はいと心ほそくつれ〳〵まさりてなかめ給ける
比中将君ひさしくまいゆぬかなと思ひいて
きこえ〇けるまゝに有明の月のまた夜ふ
かくさし出る程にいてたちていとしのひて御
ともに人なともなくや〇れておはしけり川のこ

16オ

16ウ

なたなれは船なともわつらはて御馬にてな
りけりいりもてゆくまゝに霧ふたかりて
みちもみえぬしけきのなかをわけ給にいと
あらましき風のきほひにほろ〳〵とおち
みたるゝ木葉の露のちりかゝるもいとひやゝ

17オ

かに人やりならすいたくぬれ給ぬかゝるありき
なともおさ〳〵ならひ給はぬ心ちに心ほそく
おかしくおほされけり

山おろしにたへぬ木葉の露よりもあやなく
もろきわか涙かな山かつのおとろくもうるさし
とてすいしんのをともせさせ給はすしはのま
かきをわけつゝそこはかとなき水のなかれと
もをふみしたく駒のあしをとも猶しのひて
とようゐしたまへるにかくれなき御にほひそ
風にしたかひてぬ――ししらぬかとおとろくねさ〇め
の家〳〵ありけるちかくなるほとにそのこと

17ウ

ともきゝわかれぬものゝねともいとすこけに
きこゆつねにかくあそひ給ときくをついてな
くてみこの御きむのねの名たかきもえきか
ぬそかしよきおりなるへしと思ひつゝいり給
へはひはわのこゑのひゝきなりけりわうしき
てうにしらへてよのつねのかきあはせなれと
所からにやみゝなれぬこゝちしてかきかへす
はちのをとも物きよけにおもしろしさうの
ことあはれになまめいたるこゑしてたえ〳〵き

18オ

こゆしはしきかまほしきにしのひ給へと御けは
ひしるしきくゝつけてとのゐ人めくをのこな
まかたくなしきいてきたりしか〳〵なんこもり
おはします御せうそこをこそきこえさせめと
申すなにかしかきりある御おこなひのほと
をまきらはしきこえさせんにあいなしかくぬれ〳〵
まいりていたつらにかへらんうれへをひめ君の御
方にきこえてあはれとのたまはせはなんなく

さむへきとのたまへはみにくきかほうちゑみて
申させ侍らんとてたつをしはしやとめしよせて

18ウ

としころ人つてにのみきゝてゆかしくおもふ
御ことのねともをうれしきおりかなしはしす
こしたちかくれてきくへきものゝくまありや
つきなくさし過てまいりよらんほとみなこと
やめ給てはいとほいなからんとのたまふ御け
はひかほかたちのさるなを〳〵しき心ちにも
いとめてたくかたしけなくおほゆれは人きか
ぬときはあけくれかくなんあそはせとしも人
にても宮このかたよりまいりたちましる人
侍ときはをともせさせ給はすおほかたかく女

19オ

君たちおはしますことをはかくさせたまひ
なへての人にしらせたてまつらしとおほし
のたまはするなりと申せはうちわらひてあ
ちきなき御物かくしなりしかしのひ給なれと

みな人ありかたき世のためしにきゝいつへかん
めるをとのたまひて猶しるへせよわれはすき
〳〵しき心なとなき人そかくておはします
らん御ありさまのあやしくけになへてにお
ほえたまはぬなりとこまやかにの給へはあ
なかしこ心なきやうにのちのきこえや侍らん

19ウ

とてあなたのおまへは竹のすいかいしこめて
みなへたてことなるをゝしへよせたてまつれ
り御ともの人はにしのゐうによひすゑて
このとのゐ人あひしらふあなたにかよふへか
めるすいかいのとをすこしをしあけて見給へ
は月おかしきほとに霧わたれるをなかめて
すたれをみしかくまきあけて人々ゐたりす
のこにいとさむけに身ほそくなへはめるわら
はひとりおなしさまなるおとなゝとゐたり
うちなる人ひとりははしらにすこしゐかく

れてひわをまへにをきてはちをてまさく
りにしつゝゐたるに雲かくれたりつる月の
にはかにいとあかくさしいてたれはあふきな
らてこれしても月はまねきつへかりけりと
てさしのそきたるかほいみしくらうたけに
にほひやかなるへし・そひふしたる人はこと
のうへにかたふきかゝりている日をかへすはち
こそありけれさまことにもおもひをよひ給
御心かなとてうちわらひたるけはひいます
こしをもりかによしつきたりをよはすとも

20ウ

これも月にはなるゝ物かは（は）なとはかなき
ことをうちとけのたまひかはしたる御けは
ひともさらによそに思ひやりしにはにす
いとあはれになつかしうおかしむかしものかたり
なとにかたりつたへてわかき女房なとのよ
むをもきくにかならすかやうのことをいひ
たるさしもあらさりけんとにくゝをしはから
るゝをけに哀なるものゝくまありぬへき世
なりけりと心うゐ（つ）りぬへし霧のふかけれは
さやかにみゆへくもあらす又月さし出なんとお

21オ

ほすほとにおくのかたより人おはすとつけき
こゆる人やあらんすたれおろしてみないりぬお
とろきかほにはあらすなこやかにもてなして
やをらかくれぬるけはひともきぬのをともせ
すいとなよゝかに心くるしうていみしうあ
てにみやひかなるをあはれと思給ふ・やをら（ら）
たちいてゝ京に御くるまゐてまいるへく人
はしらせつありつるさふらひにおりあしくまい
り侍けれと中〳〵うれしくおもふことすこし
なくさめてなんかくさふらふよしきこえよいた

21ウ

うぬれわ（に）たるかこともきこえさせむかしと
のたまへはまいりてきこゆかくみえやしぬらん
とはおほしもよらてうちとけたりつることゝも

をきゝやし給ひつらんといといみしくはつかし
あやしくにほふ風の吹つるを思かけぬほと
なれはおとろかさりける心をそさよと心〇ま
とひてはちおはたうす御せうそこなと
つたふる人もいとうひ〳〵しき人なめるをお
りからにこそよろつの事もとおほいて
またきりのまきれなれはありつるみすの

22オ

まへにあゆみいてゝついゐたまふ山さとひたる
わかき人ともはさしいらへまこえんことのはもお
ほえて御しとねさしいつるさまもたと〳〵し
けなり・このみすのまへにははしたなく侍り
けりうちつけにあさき心はかりにてはかくも
たつねまいるましき山のかけちにおもふたま
ふるをさまことにてこそかく露けきたひを
かさねてはさりとも御らんしるらんとなんた
のもしう侍りといとまめやかにのたまふ・わか
き人々のなたらかに物きこゆへきもなく

きえかへりかゝやかしけなるもかたはらいた
けれは女はらのおくふかきをおこし出るほと
ひさしくなりてわさとめいたるもくるしうて・
なにこともおもひしらぬありさまにてしり
かほにもいかゝはきこゆへきといとよしありあ
てなるこゑしてひきいりなからほのかにの給ふ・
かつしりなからうきをしらすかほなるも世の
さかとおもふ給へしるをひと所しもあまりお
ほめかせ給ふらんこそくちおしかるへけれ有か
たうよろつを思ひすましたる御すまゐなと

22ウ

にたくひきこえさせ給ふ御心のうちはなに事
もすゝしくをしはかられ侍れは猶かく忍ひ
あまり侍るふかさあさゝのほともわかせ給はん
こそかひはは八らめよのつねのすき〳〵しき
すちにはおほしめしはなつへくやさやうの
かたはわさとすゝむる人侍ともなひくへうも

23オ

あらぬ心つよさになんをのつからきこしめし
〇(あは)するやうも侍なんつれ〳〵とのみ過し侍る世
の物かたりもきこえさせとところにたのみ
きこえさせ又かく世はなれてなかめさせ給

23ウ

らん御心のまきらはしにもさしもおとろかさせ
たまふはかりきこえなれ侍らはいかにおもふ
さまに侍らんなとおほくのたまへはつゝましく
いらへにくゝておこしつる老人のいてきたる
にそゆつり給・たとしへなくさし過してあなか
たしけなやかたはらいたきおましのさまにも
侍るかなみすのうちに〓(こゑ)そわかき人々は〇(もの)のほ
としらぬやうに侍こそなとしたゝかにいふ
こゑのさたすきたるもかたはらいたく君
たちはおほす・いともあやしく世中にすまゐ

24オ

給ふ人のかすにもあらぬ御有さまにてさも
ありぬへき人々たにとふらひかすまへきこ
え給ふもみえきこえすのみなりまさり
侍ゐめるにありかたき御心さしのほとは数に
も侍らぬ心にもあさましきまて思ふ給へき
こえさせ侍るをわかき御心ちにもおほしし
なからきこえさせ給にくきにや侍らんといと
つゝみなく物なれたるもなまにくき物から
けはひいたう人めきてよしあるこゑなれは・
——
いとたつきもしらぬ心ちしつるにうれしき

御けはひにこそなに事もけに思ひしり給
けるたのみこよなかりけりとてよりゐ給け
るをき丁のそはよりみれはあけほのゝやう〳〵
物の色わかるゝにけにやつし給へるとみゆる
かりきぬすかたのいとぬれしめりたるほと
うたてこの世のほかのにほひにやとあやしき
まてかほりみちたり・この老人はうちなき
ぬさし過たるつみもやとおもふ給へしのふれ
と哀なるむかしの御物かたりのいかならんつい

24ウ

てに〇(も)うちいてきこえさせかたはしをもほのめか

ししろしめさせんととしころねんすのついて
にもうちませ思ふ給へわたるしるしにやうれ
しきおりに侍るをまたきにおほ(ほ)れ侍る涙
にくれてえこそきこえさせす侍けれとうち
わなゝくけしきまことにいみしく物かなしと
おもへり・おほかたさたすきたる人はなみたも
ろなる物とはみきゝ給へといとかうしもお
もへるもあやしうなり給て・こゝにかくま
いることはたひかさなりぬるをかくあはれしり
給へる人もなくてこそ露けきみちのほと

25オ

にひとりのみそほちつれうれしきついてなめ
るをことなのこい給そかしとのたまへは・かゝる
ついてしもは(侍)ゝらしかし又侍るとも夜のまのほ
としらぬ哀のたのむへきにも侍らぬをさらは
たゝかゝるふるもの世には(侍)ゝりけりとはかり

25ウ

しろしめされ侍らなん三条宮に侍しこ侍従
はかなくなり侍にけるとほのきゝ侍しその
かみむつましうおもふ給へしおなしほとの人
おほくうせ侍にける世のすゑにはるかなる
せかいよりつたはりまうてきてこの五とせ

26オ

むとせのほとなんこれにかくさふらひ侍りえ
しろしめさしかしこのころ藤大納言と申なる
御このかみの右衛門督にてかくれ給にしはもの
のついてなとにやかの御うへとてきこしめし
つたふることも侍らん過給ていくはくもへた
たらぬ心ちのみし侍るそのおりのかなしさもま
た袖のかはくおり侍らすおもふ給へらるゝを手を
おりてかそへ侍れはかくおとなしくならせ給に
ける御よはひのほとも夢のやうになんかの
故権大納言の君の(オ)御めのとに侍しは弁かは

26ウ

はになん侍し朝夕につかうまつりなれ(なれイ)侍しに

人かすにも侍らぬ身なれと人にしらせす御
心よりはたあまりけることをおり〳〵うちかす
めのたまひしをいまはかきりになり給にし御
やまひのすゑつかたにめしよせていさゝかの
たまひをく事侍しをきこしめすへきゆへなん
一ことは〻れとかはかりきこえいて侍にのこり
をとおほしめす御心侍らはのとかになんきこ
しめしはて侍るへきわかき人々も〇はらいた
くさしすきたりとつきしろひ侍るめるも

27オ

ことはりになんとてさすかにうちいてすなり
ぬ・あやしく夢かたりかむなきやうの物のと
はすかたりするゆんやうにめつらかにおほさるれ
とあはれにおほつかなくおほしわたることのす
ちをきこゆれはいとおくゆかしけれとけに人
めもしけしさしくみにふる物かたりにかゝつらひ
て夜をあかしはてんもこち〳〵しかるへけれは・
そこはかと思ひ〇ことはなき物からいにしへの
事ときゝ侍も物あはれになんさらはかなら
すこのこりきかせ給へきりはれゆかははし

27ウ

たなかるへきやつれをおもなくこらんしとかめ
られぬへきさまなれはおもふたまふる心の
ほとよりはくちおしうなんとてたち給にかの
おはします寺の鐘のこゑかすかにきこえて霧
いとふかくたちわたれり嶺のやへくも思ひ
やるへたておほくあはれなるに猶この姫君
たちの御心のうちとも〇くるしうなにことを
おほしのこすらんかくいとおくまり給へるもこと
はりそかしなとおほゆ
　朝ほらけ家ちもみえす尋こしまきの

28オ

を山はきりこめてけり心ほそくも侍かなとたち
かへりやすらひ給へるさまを宮この人のめなれ
たるたになをいとことに思ひきこえたるを
まいていかゝはめつらしう見さらん御かへりきこ

えつたへにくけに思ひたれはれいのいとつゝましけにて

雲のゐる嶺のかけちを秋きりのいとゝへたつるころにもあるかなすこしうちなけい給へるけしきあさからすあはれなり・なにはかりおかしうきふしはみえぬあたりなれとけに心くるしき

28ウ

事おほかるにもあかうなりゆけはさすかにひたおもてなる心ちして中〳〵なるほとにうけたまはりさしつることおほかるのこりは今すこしおもなれてこそはうらみきこゆさすへかめれさるはかく世の人めいてもてなし給ふへくはおもはすに物おほしわかさりけりとうらめしうなんとてとのゐ人〇しつらひたるにしおもてにおはしてなかめ給ふあしろは人さはかしけなりされとひをもよらぬにやあらんすさましけなるけしきなりと御ともの人々見

29オ

しりていふあやしき舟ともにしはかりつみをの〳〵なにとなき世のいとなみともにゆきかふさまとものはかなき水のうへにうかひたるたれもおもへはおなしことなるにのつねなさなり我はうかはす玉のうてなにしつけき身とおもふへき世かはとおもひつゝけらるすゝりめしてあなたにきこえたまふ

はしひめの心をくみてたかせさすさほのしつくに袖そぬれぬるなかめ給ふらんかしとて殿ゐ人にもたせ給へりいとさむけに

いらゝきたるかほしてもてまいる御返かみのかなとおほろけならんははつかしけなるをときこそはかゝるおりはとて

さしかへるうちの川おさあさゆふのしつくや袖をくたしはつらん身さへうきてといとおかしけにかき給へりまほにめやすく物し給けりと心とまりぬれと御車ゐてまいりぬ

29ウ

と人々さはかしきこゆれはとのゐ人はかりを
めしよせてかへりわたらせ給はんほとにかなら
すまいるへしなとのたまふぬれたる御そ

30オ

ともはみなこの人にぬきかけ給てとりに
つかはしつる御なをしにたてまつりかへつ・おい
人の物かたり心にかゝりておほしいてらる・思ひ
しよりはこよなくまさりておほとかにおかし
かりつる御けはひともおもかけにそひて猶お
もひはなれかたき世なりけりと心よはくおも
ひしらる御ふみたてまつ〇(り)たまふけさうた
ちてもあらすしろきしきしのあつこへたる
もふ(に)てはひきつくろひえりてすみつき見
ところありてかきたまふ・うちつけなるさまに

30ウ

やとあいなくとゝめ侍てのこりおほかるもくる
しきわさになんかたはしきこえをきつるやうに
いまよりはみすのまへも心やすくおほしゆるす
へくなん御山こもりはて侍らん日かすもうけ
給りをきていふせかりしきりのまよひも
はるけ侍らんなとそいとすくよかにかき衍(給へ)る
左近のそう(尉)なる人御つかひにてかの老人た
つねてふみもとらせよとのたまふ殿ゐ人か
さむけにてさまよひしなと哀におほしやり
ておほきなるひはりこやうの物あまたせさせ

給ふ又の日かの御てらにも奉り給山こもりの
僧ともこのころのあらしにはいと心ほそくくる
しからんをさておはしますほとのふせたまふへか
らんとおほしやりてきぬわたなとおほかりけり
御をこなひはてゝ出たまふあしたなりけれは
をこなひ人ともにわたきぬけさころもなと
すへて一くたりのほとつゝあるかきりのたいと
こたちに給ふ・とのゐ人かの御ぬきすてのえ
むにいみしきかりの御そともえならぬしろ
きあやの御そのなよ〳〵といひしらすにほへる

31オ

をうつしきて身をはたえかへぬ物なれはにつ
かはしからぬ袖のかを人ことにとかめられめてら
るゝなん中〳〵所せかりける心にまかせて身
をやすくもふるまはれすいとむくつけきまて
人のおとろくにほひをうしなひてはやとおも
へとところせき人の御うつりかにてえもすゝき
すてぬそあまりなるや・君はひめ君の御返
こといとめやすくこめかしきをおかしく見給ふ
宮にもかく御せうそこありきなと人々聞え
させ御らんせさすれはなにかはけさうたちて

31ウ

もてない給はんも中〳〵うたてあらんれいのわか
人にゝぬみ心はへなめるをなからんのちもな
とひとことうちほのめかしてしかはさやうにて
心とゝめたらんなとのたまふけり御身つからも
さま〳〵の御とふらひの山の岩やにあまりし
事なとのたまへるにまうてんとおほして三の

32オ

宮のかやうにおくまりたらんあたりの見まさ
りせんこそおかしかるへけれとあらましことにたに
の給ふ物をきこえはけまして御心さはかした
てまつらんとおほしてのとやかなるゆふくれ

32ウ

にまいり給へりれいのさま〳〵なる御物かたりき
こえかはし給ふついてにうちの宮のことかたり
いてゝみし暁のありさまなとくはしくきこえ
給に宮いとせちにおかしとおほいたりされ
はよと御けしきをみていとゝ御心うこきぬ
へくいひつゝけ給ふさてそのありけん返こと
はなとかみせ給はさりしまろならましか
はとうらみ給ふさかしいとさま〳〵御らんすへか
めるはしをたにみせさせ給はぬかのわたりは
かくいともむもれたる身にひきこめてやむ

33オ

へきけはひにも侍らねはかならす御らんせさせ
はやと思給へれといかてかたつねよらせ

給へきかやすきほとこそすかまほしくはいと
よくすきぬへき世に侍りけれうちかゝ(く)ろへつゝ
おほかめるかなさるかたに見ところありぬへき
女のものおもはしきうちしのひたるすみか(すみかイ)山
さとめいたるくまなとにをのつから侍へめりこ
のきこえさすか(る)わたりはいとよつかぬひしり
さまにてこち〳〵しうに(そ)あらんととしころ思
ひあなつり侍りてみゝをたにこそとゝめ侍ら

33ウ

さりけれほのかなりし月かけの見おとり
せすはまほならんはやけはひありさまはたさは
かりならんをそあらまはしきほとゝおほえ
侍へきなときこえ給はて〳〵はまめたち
ていとねたくおほろけの人に心うつす(る)まし
き人のかくふかくおもへるをゝろかならしとゆかし
うおほすことかきりなくなり給ぬ猶又〳〵
よくけしき見給へと人をすゝめ給てかき
りある御身のほとのよたけさをいとはしき

まて心もとなしとおほしたれはおかしくてい

34オ

てやよしなくそ侍るしはし世中に心とゝめ
しとおもひたまふるやうある身にてなを
さりことものつゝましう侍るを心なからかなはぬ
心つきそめなはおほきに思ひにたかふへきこ
となん侍へきときこえ給へは・いてあなこと〳〵
しれいのおとろ〳〵しきひしりことはみはて
てしかなとてわらひたまふ・心のうちにはかのふ
る人のほのめかしゝすちなとのいとゝうちおと
ろかれて物あはれなるにおかしとみること
もめやすしとき(く)あたりもなにはかり心にも

34ウ

とまらさりけり・十月になりて五六日のほ
とにうちへまうて給あしろをこそこのころ
は御らんせめときこゆる人々あれとなにかそ
のひほ(を)むしにあらそふ心にてあしろにもよ
らんとそきすて給てかろらかにあしろ車に

てかとりのなをしさしぬきぬはせてことさ
らひき給へり宮まちよろこひ給て所に
つけたる御あるしなとおかしうしなしたまふく
れぬれはおほとなふ丶ちかくてさき〳〵みさ
し給へるふみとものふかきなとあさりもさうし

35オ

おろしてきなといはせたまふうちもまとろ
ます川風のいとあらましきに木葉のち
りかふをと水のひゝきなと哀もすきて
〇おそろしく心ほそき所のさまなり明方ちかく
なりぬらんとおもふほとにありしゝのゝめ思ひ
出られて琴のねのあはれなることのついて
つくりいてゝさきのたひきりにまとはされ
侍し明ほのにめつらしき物のね一こゑうけ
たまはりしのこりなん中〳〵にいといふ
かしうあかすおもひ給へらるゝなと聞えた

35ウ

まふ色をもかをも思ひすてゝしのちむかしき
きしこともみなわすれてなんとの給へと人め
して琴とりよせていとつきなくなりに
たりやしるへする物のねにつけてなん思ひ
いてらるへかりけるとてひはめしてまらふと
にそゝのかしたまふとりてしらへたまふさら
にほのかにきゝ侍しおなし物とも思給へられ
さりける御ことのひゝきからにやとそおもふ
給へしかとて心とけてもかきたて給はすいて
あなさかなやしか御みゝとまるはかりの手なと

はいつくよりはこゝまてはつたはりこむある
ましき御ことなりとてきんをかきならし給
へるいとあはれに心すこしかたへはみねの松
風のもてはやすなるへしいとたと〳〵しけに
おほめき給て心はへある手ひとつはかりに
てやめ給つこのわたりにおほえなくており〳〵
ほのめく生のことのねこそ心えたるにやと
きくおり侍れと心とゝめてなともあらて

36オ

ひさしうなりにけりや心にまかせてをの〳〵
かきならすへかめるは川なみはかりやうちあは

36ウ

すらんろなう物のようにすはかりのはうしなと
もとまらしとなんおほえ侍とてかきなら
し給へとあなたにきこえ給へと思ひよら
さりしひとりことをきゝ給けんたにある物を
いとかたわならんとひきいりつゝみなきゝ給
はすたひ〳〵そゝのかしきこえ給へととかくき
こえすさひてやみ給ぬめれはいとくちおし
うおほゆ・そのついてにもかくあやしうよつか
ぬおもひやりにて過すありさまともの思ひ
のほかなることなとはつかしうおほいたり人に

37オ

たにいかてしらせしとはくゝみすくせとけふ
あすともしらぬ身の残りすくなさにさすかに
ゆくすゑとをき人はおちあふれてさすらへ
ん事これのみこそけに世をはなれんきは

のほたしなりけれとうちかたらひ給へは心く
るしう見奉り給・わさとの御うしろみたち
はか〳〵しきすちには侍らすともうと〳〵しから
すおほしめされんとなん思たまふるしはし
もなからへ侍らん命のほとはひとこともかく
うちいてきこえさせてんさまをたかへ侍ましく

37ウ

なんなと申給へはいとうれしきことゝおほし
のたまふ・さてあか月かたの宮の御をこなひ
したまふほとにかの老人めしいてゝあひ給へり
姫君の御うしろみにてさふらはせ給ふ弁君と
そいひけるとしは六十にすこしたらぬほとなれ
とみやひかにゆへあるけはひして物なときこ
ゆ故権大納言の君のよとゝもに物を思つゝ
やまひつきはかなくなり給にしありさまをき
こえいてゝ〇ことかきりなし・けによその人のう
へときかんたにあはれなるへきふることゝもを

38オ

ましてとしころおほつかなくゆかしういかなり
けん事のはしめにかと仏にもこのことをさた
かにしらせ給へとねんしつるしるしにやかく夢
のやうに哀なるむかしかたりをおほえぬつい
てにきゝつけつらんとおほすに涙とゝめか
たかりけりさてもかくその世の心しりたる人
ものこり給へりけるをめつらかにもはつかしう
もおほゆることのすちに猶かくいひつたふる
たくひや又もあらんとしころかけてもきゝをよ
はさりけるとの給へは小侍従と弁とはなち

て又しる人侍らし一ことにても又こと人にうち
まねひ待らすかく物はかなく数ならぬ身
のほとに侍れとよるひるかの御かけにつき
たてまつりて侍しかはをのつから物のけし
きをも見たてまつりそめしに御心より
あまりておほしけるとき〳〵たゝふたりのな
かになん玉さかの御せうそこのかよひも侍し

38ウ

かたはらいたけれはくはしくもきこえさせ
すいまはのとちめになり給ていさゝかの
たまいをく〇との侍しをかゝる身にはをき所

なくいふせくおもふ給へわたりつゝいかにして
かはきこしめしつたふへきとはか〳〵しからぬ
ねんすのついてにもおもふ給へつるを仏は
世におはしましけりとなんおもふ給へしりぬる
御らんせさすへき物も侍り今はなにかはやき
もすて侍なんかくあさゆふのきえをし
らぬ身のうちすて侍りなはおちゝるやう
もこそといとうしろめたく思給ふれとこの
宮わたりにも時〳〵ほのめかせたまふをまち
いてたてまつりてしかはすこしたのもしく

かゝるおりもやとねんし侍つるちからいてまう
てきてなんさらにこれはこの世のことにも侍
らしとなく〳〵こまかにむまれ給けるほとのこ

39オ

39ウ

ともよくおほえつゝきこゆむなしうなり給し
さはきには丶に侍し人はやかてやまひつき
てほとも屯すかくれ侍りにしかはいとゝおもふ
給へしつみふちころもたちかさねかなしきこと
を思給へしほとにとしころよからぬ人の心を
つけたりけるか人をはかりこちてにしの海の
はてまてとりもてまかりにしかは京のこと

さへあとたえてその人もかしこにてうせ侍に
しのちとゝせあまりにてなんあらぬ世の心ち
してまかりのほりたりしをこの宮はちゝか
たにつけてわらはよりまいりかよふゆへ侍し
かは今はかう世にましらふへきさまにも侍ら
ぬをれいせい院の女御とのゝ御かたなとこそ
はむかしきゝなれ奉りしわたりにてまいりよ
るへく侍しかとはしたなくおほえ侍てえさし
いて侍らてみ山かくれのくち木になりにて侍
るなり小侍従はいつかうせ侍にけんそのかみ

40オ

のわかさかりと見侍りし人はかすゝくなくな
り侍にけるすゑの世におほくの人にをく
るゝ命をかなしく思給へてこそさすかにめく
らひ侍れなときこゆるほとにれいの明はて
ぬよしさらはこの昔物かたりはつきすへくなん
あらぬ又人きかぬ心やすき所にてきこえん
侍従といひし人はほのかにおほゆるは五六は
かりなりしほとにやにはかにむねをやみ
てうせにきとなんきくかゝるたいめなくはつみ
をもき身にて過ぬへかりける事なとの

たまふ・さゝやかにをしまきあはせたるほくと
ものかひくさきをふくろにぬ〇いれたるとり
いてゝたてまつる・御まへにて土しなはせ給
へ我猶いくへくもあらすなりにたりとのたまは
せてこの御ふみをとりあつめて給はせたり
しかは小侍従に又あひみ侍らんついてにさた

40ウ

41オ

かにつたへまいらせむと思給へしをやかてわかれ
侍にしもわたくしことにはあらすかなしうなむ
思たまふるときこゆ・つれなくてこれはかくい
給つかやうのふる人はとはすかたりにやあや

しきことのためしにいひいつらんとくるしくおほ
せと返々もちらさぬよしをちかひつるさもやと
又思ひみたれ給・御かゆこはいゐなとまいり給
昨日はいとま日なりしをけふはうちの御物いみ
もあきぬらん院の女一宮なやみ給御とふら
ひにかならすまいるへけれはかた〳〵いとまな
く侍るを又このころ過して山のもみちちらぬ
さきにまいるへきよし聞えたまふ・かくしは〳〵
たちよらせ給ふをひかりに山のかけもすこし
物あきらむる心ちしてなんなとよろこひ聞え

41ウ

給・かへり給てまつこのふくろを見給へはからの
ふせむれうをぬひて上といふもしをうへに

42オ

かきたりほそきくみしてくちのかたをゆひた
るにかの御名のふうつきたりあ小るもおそ
ろしうおほえ給色々のかみにて玉さかにかよ
ひける御ふみのかへりこと五六そあるさては
かの御方にてやまひはおもくかきりになり
にたるに又ほのかにも聞えむことかたくなりぬ
るをゆかしう思ことはそひにたり御かたちも
かはりておはしますらんかさま〳〵かなしきこと

をみちのくにかみ五六まひにつふ〳〵とあやし
きとりのあとのやうにかきて
　めのまへにこの世をそむく君よりもよそに
わかるゝ玉そかなしき又はしにめつらしくきゝ
侍るふたはのほともうしろめたう思たまふる
かたはなけれと
　命あらはそれともみまし人しれぬ岩ねに
とめし松のをひすゑかきさしたるやうにいと
みたりかはしくて侍従の君にとうへにはかきつけ

42ウ

たりしみといふむしのすみかになりてふるめ

43オ

きたるかひくさゝなからあとはきえすたゝいま
かきたらんにもたかはぬことのはとものこま〳〵と
さたかなるを見たまふにけにおちゝりたら
ましよとうしろめたういとおしきことゝもなり
かゝる事世に又あらんやと心ひとつにいとゝ物
おもはしさそひてうちへまいらんとおほしつるも
いてたゝれす宮の御まへにまいり給へれは
いとなに心なくわかやかなるさまし給て経
よみ給をはち〇ひてもてかくし給へゐなにかは
しりにけりともしられたてまつらんなと心に
こめてよろつにおもひゐたまへり

43ウ

注

（1）「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録　源氏物語秘訣」『文学部紀要』第四七巻二号（中京大学文学部　平成二五年三月）

（2）「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆　桐壺」『文学部紀要』第四八巻一号（中京大学文学部　平成二五年十月）

（3）「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆　帚木」『文学部紀要』第四八巻二号（中京大学文学部　平成二六年三月）

（4）「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆　空蟬　岡本主水筆　夕顔」『文学部紀要』第四九巻一号（中京大学文学部　平成二六年十月）

（5）注4に同じ。

（6）「長谷川端蔵『源氏物語』岡本主水筆　若紫　石井了倶筆　末摘花　左馬助筆　花宴」『文学部紀要』第四九巻二号（中京大学文学部　平成二七年三月）

（7）「長谷川端蔵『源氏物語』東寺観智院筆　葵　岡本主水筆　賢木　北左平次行生筆　花散里」『文学部紀要』第五〇巻一号（中京大学文学部　平成二七年十月）

（8）「長谷川端蔵『源氏物語』大鳥居信岩筆　須磨　岡本主水筆　明石　澪標」『文学部紀要』第五〇巻二号（中京大学文学部　平成二八年三月）

（9）注6に同じ。

（10）「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　紅葉賀」『文学部紀要』第四六巻二号（中京大学文学部　平成二四年三月）

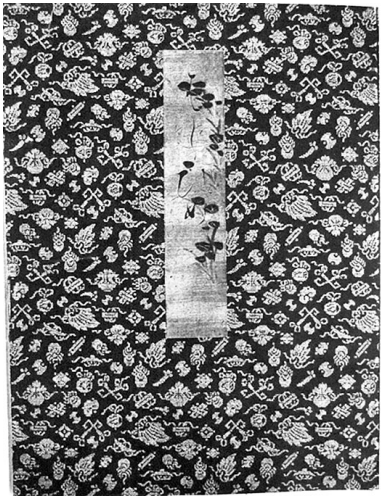
（11）「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆　宿木」『文学部紀要』第四七巻一号（中京大学文学部　平成二四年十月）

（12）注6に同じ。

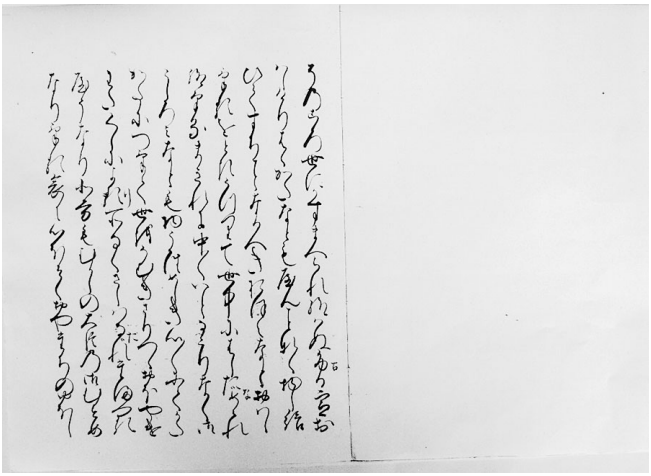
（13）注7に同じ。

（14）注7に同じ。

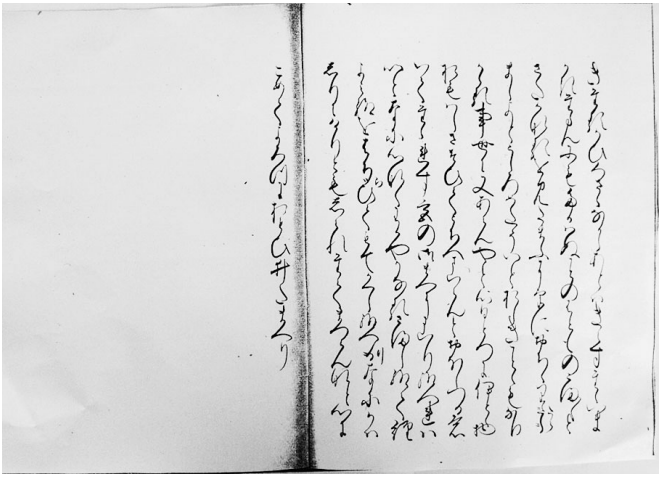
（15）注8に同じ。
（16）注4に同じ。
（17）注6に同じ。



① 橋姫　表紙



② 橋姫　１オ



③　橋姫　終丁